

犯罪被害者等施策講演会（第 15 回）

日時：令和 7 年 2 月 25 日（火）14 時～15 時 10 分

場所：中央合同庁舎 2 号館地下 2 階大会議室

演題：「最愛の娘を奪われて」

講師：小谷 真樹 氏

皆様、初めまして。小谷真樹と申します。本日は、このような場にお招きいただきありがとうございます。正直ちょっと緊張はしていますが、最愛の娘を奪われたこと、娘達が犯罪被害に遭ったことを通して私が体験し感じたことを皆様にお話ししたいと思います。たどたどしく、聞き取りにくいところもあると思いますけれども、どうか御理解いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

最初に私が話す前に、この話の中心は次女の真緒になりますので、真緒が生きていた頃の動画を皆様に見ていただきたいと思います。スクリーンを御覧ください。

（動画上映）

娘は 2005 年 1 月 17 日生まれです。今見ていただいた映像は、小学校 1 年生入学のときの映像になります。事件は、この 1 年後に起きました。このときは、小学校を卒業して中学校に進学、高校、大学へと、当たり前のように未来があると私自身思っていました。漠然とですが、本当にこういった被害に巻き込まれることはなく、すくすくと成長してくれるものだと思っていました。

私の大切な娘を紹介させてもらいます。1 番右に映っていますのが、今御紹介した次女の真緒になります。真ん中に映っていますのが長女になりまして、長女も同じ交通犯罪によって被害を受けました。幸い長女はけがで済んで命は助かったのですが、長女自身も、心にも体にも大きな傷を負うこととなりました。1 番左に映っていますのが三女になりまして、当時は保育園の年長組でした。事件のことは周りから聞いたり、それこそニュース報道を見て、幼いながらに事件のことに衝撃を受けていたのを覚えています。この写真は事件 1 か月前、3 月のひな祭りのときの写真になります。3 人がこうして写っている写真は、これが最後のものとなってしまいました。

そして、私の前に立っているのが「生命のメッセージ展」というところで活動している娘の人型パネルになります。生命のメッセージ展とは、殺人、交通犯罪、いじめや一気飲ませなど、理不尽に命が奪われた犠牲者が主役のアート展です。私達がメッセンジャーとこのパネルを呼んでいますが、この人型パネルは犠牲者一人ひとりが等身大になっていて、娘は事件当時の 123 センチの身長でこうして立っています。胸元には、私達家族の思いを貼って、足元には生きた証である靴を置いて、命の大切さを全国各地に呼びかけています。

このメッセージ展の始まりというものを少し紹介したいのですが、代表の方の1人息子さんの死をきっかけに、このメッセージ展は始められました。その場限りの話題で終わらせてはならないという思いでこういった形を生み出され、2001年、僅か16名の参加家族で、このメッセージ展を始められたそうです。

この「生命」という字なのですが、私達、「生命」と書いて「いのち」と呼んでいます。そこには生きたくても生きられなかった犠牲者がメッセンジャーとなって、新たな命が生まれて、またその命を生かす、私達が犠牲者の分まで命を生きるという思いを込めて、「生命」と書いて「いのち」と呼んでいます。

この生命のメッセージ展のことは、映画化もされております。命に代わるものはないと伝えたい、生きたくても生きられなかったメッセンジャー達の思いを感じてほしいと私達は思っています。被害者も加害者も生まれない、命が大切にされる社会実現を願って活動をしています。

現在、昨年の10月ですけれども、148名のメッセンジャーの数になっています。当初は16名から始められた団体も、今こうやって多くの方が参加していることになります。そこで活動させてもらっているのが、このメッセンジャーとなった娘のパネルです。お時間あったら見てもらいたいなと思いますし、お近くで開催されているときは、ぜひ足を運んでほしいなと思います。

それでは、今日、私から皆様に受け止めていただきたい思いを2つ御紹介させていただきます。他人事ではなく自分事として捉えてほしいという思いと、生きている今、大切な人とともに過ごせる時間は決して当たり前じゃないということを皆様にも考えてもらえたらなと思います。犯罪被害は、交通犯罪、殺人、窃盗や詐欺など種類は広範囲に及びます。そして、今日私は、交通犯罪の被害者、娘を奪われた父親としてお話をさせていただきます。

事件によってだけではなく、同じ事件の被害者や、また、家族それぞれでも考え方が本当に違うことは、皆様も御存じのことと思います。ですが、他人事ではなく自分事として捉えてほしい、生きている今を大切な人とともに過ごせる時間は当たり前じゃない、この2つは、多くの犯罪被害者が思っていることだと私自身は思っています。共通して思っていることだと思っています。犯罪被害の根絶、被害者支援の拡充に向けて考えていく上では原点となる考えだと思いますので、どうぞ心にとどめてもらいたいなと思います。

ここから3つのパートに分けてお話しします。「あの日」と題して、まず事件当日のお話を皆様にさせてもらいたいと思います。事件の話をする前に、昨年、2024年4月の現地で法の要のときのニュース動画を、皆様にまず見ていただきたいと思います。

(動画上映)

今、報道の動画でありましたとおり、無免許の少年が集団登校の列に突っ込むという事件でした。お腹の中の赤ちゃん、当時7か月の胎児も含めて、4つの命が奪われるという事件でした。

ここで1つ皆様に御紹介したいデータがあるのですが、4,411人というのは、2012年、私の娘が被害に遭った年の交通事故と呼ばれるもので亡くなられた方の死者数になります。発生してから24時間以内と書いているとおり、それ以降に亡くなられた方は含まれていません。これが良いか悪いかは置いておいてもらって、単純に365日で割ると、1日約12名の方がこの年に亡くなられていることになりました。調べたところ、年々減少しているとはいえ、2023年でも交通事故死者数と呼ばれるものは2,678名でした。365で割ると1日7名ぐらいの方が、今でも交通事故と呼ばれるもので命を落としている現実があります。

また、命は助かったものの後遺症を負わされて、私達遺族を含め、事件前とは全く違う世界で生きていかなければいけなくなった人達は大変多くおられます。自分の娘の命というものを、こうしてデータ、数字で語るのには本当は心苦しいのですが、データから見ても、私が体験したようなことが決して特別じゃなくて、もしかしたら今もこの日本のどこかで日々起こっていることなやと皆様に感じてもらいたかったので、このデータを示させてもらいました。

ここからは、事件当日の話をさせてもらいます。2012年4月23日、それぞれ小学校に行っていたこども達が新しい学年に上がりまして、ちょうどクラスに慣れだした頃でした。私は普段こども達よりも早く仕事に出ているんですが、たまたまその日はこども達と同じ時間に家を出るというような仕事の内容でした。2人が準備をしている中で、2人に対して、「早う準備しいや。今日雨降るかもしれへんし、傘持って行くんやで」みたいなことを声かけました。天気予報を見ていると、夕方頃に少し雨が降るというような予報だったので、傘を持って行くように2人に話をしたのです。すると、次女の真緒が、「雨降るんやったら新しい靴履いて行かへんわ」というような返事をくれました。

新しい靴履いて行かへんというのは何かといいますと、この日は月曜日だったんですけども、前日の日曜日に、近くのショッピングモールに行ったときに、真緒は、「これも買おうて」と言って、当時真緒が好きだったたまごっちの筆箱と一緒に白い靴を持ってきました。普段なかなかおねだりとかをしてこない子だったのですが、多分新しい学年にもなって、気持ちも前向きになったところだったので、欲しいなと思ったのか、私に言ってきて、「せっかくだから買おうか」と言って買って家に帰ったんです。真緒はすぐさま靴を用意して、あしたから靴を履くのを楽しみに玄関に揃えていました。ですが、先ほど私が「雨降るかもしれへんし」と言ったことに対して、靴が汚れるのが嫌だったのか、当たり前のようにあしたが来ると思い、「あした履くわ」と、真緒は今まで履いていた靴、今ここの足元にあるのですけれども、この靴を履いて学校に向かいました。

2人が集団登校の列に合流するときに、私はその2人を見送っていました。すると2人が、普段私が見送ることが少なかったために、嬉しかったのか、喜んでくれていたのかなと今では思うのですが、2人揃って振り向いて、ニヤニヤとしながら私の方を見て、私も「こっちいいからはよ行き。みんな待つてはるんやから」と集団登校の列に早く行くように言葉をかけたのが、私が真緒にかけた最後の言葉となりました。

2人が集団登校に入ってから出発したときに、私もすぐに会社に向かいました。私は亀岡市というところに住んでいまして、職場は隣にある京都市になるのですが、運送業のドライバーをしていました。その日、トラックに乗り込んで出発しようとする、私の同居している母親から連絡がありました。真緒からすると、おばあちゃんです。普段連絡がくることはほぼなかったのですが、電話がかかってきたので、どうしたんだろうなと思いながら電話に出てみると、こども達の集団登校の列で事故があったというような、詳細が何も分かっていない一報でした。「取りあえず、私達、すぐに現場に向かうから」という話だったのですが、私もすぐに会社に話をして、現場に向かえるよう手配をしてもらいました。

私は電話だけでは何も分からなかったのですが、真緒がすぐに病院に運ばれたということだったので、私は現場に向かうのをやめて、真緒が運ばれた病院に向かうことにしました。その時は、真緒、頭打ってへんやろうかとか、どっか骨折れてへんやろうかなと、本当に命に関わることだとはこれっぽっちも考えずに、車を走らせていたのを覚えています。

扉が開き、中に入ると多くの方々が、何かを取り囲んでいるような様子やったんですね、慌ただしく。そして、私が入っていくと、人だかりの中、道が開いて、その先には、少しあごの骨が砕けてしまって口元がゆがんでしまって、鼻や口から血を噴き出し、顔が傷だらけの状態になっている真緒が横たわっていました。体の方に目をやると、治療のため服は全部切られていたのですが、腰の辺りに目をやると、腰の辺りの肉がざっとなくなってしまっていて、そこから大量の血を出し、辺り一面血まみれの状態にしている娘が横たわっていました。さっき「行ってくるわ」と言って、にこってして出ていったはずの娘が、何でこんなことになっているんやと。頭が真っ白になってしまって、何でや何でやと思うことしか私はできませんでした。

いて、私にさらなる不安と衝撃が押し寄せてきたのですが、おそるおそる話を聞いてみると、顔や体に傷はあるものの、「娘さんは大丈夫です」というような話だったのです。長女には申し訳ないけれど、長女のことは病院にお任せして、私はすぐ真緒が治療されている部屋に戻りました。

すると先ほどよりも慌ただしくなっていて、医師の方が寄って来られて、お話をされたのです。それが、「この病院では治療が追いつきません。救命救急の設備が整っている兵庫県の豊岡市というところにある病院に娘さんをヘリで搬送します」というお話でした。私自身、医療の知識は全くないのですけれども、「そんな離れたところに娘を移動させるなんておかしいやろ」というようなことで大分突っかかってしまったのですが、もうこれしか助かる手段がないというようなことで、皆様準備をされだしていました。真緒と一緒に私はヘリポートまで上がって行ったのですが、その間も真緒は輸血されている血がそのまま体の至るところ、鼻や口から噴き出しているような状態だったので、大丈夫なんかと、「頑張れ、頑張れ」と、私は情けないのですが、ただただ声をかけることしかできませんでした。

ヘリポートに着いて真緒がヘリに乗せられ、私も一緒に乗り込もうとすると、「お父さんはヘリに乗れません」というお話でした。定員の関係で乗ることができなかったそうなのです。何かできるわけじゃないのですが、「そんな状態の娘をただ見送るだけはできひん。一緒になって行かな無理や」と、わがままといいますが、大分無理を言ったのですが、「どうしても無理です」という話でした。結果、私は、ヘリに乗せられて飛び立っていく娘を見送ることしかできませんでした。

その後は、何時間かかったのか覚えてはいないのですが、自分の運転で車を走らせて、兵庫県の豊岡市にある病院に私は向かいました。豊岡市にある病院に到着して、「こちらで少しお待ちください」と案内されたのですが、たった数分のことだとは思うのですけれども、その病院の治療室の前で待たされていたその時間がとても長く感じたことを今でも覚えています。

案内され、扉が開くと、私の目に入ったのは、真緒の上に覆いかぶさり心臓マッサージがされている状態の光景でした。お話を聞くと、真緒は搬送している最中に、2度心肺が停止したそうです。それでも生きたいと願った真緒は必死に頑張り、医師の方の治療もあって、2度心臓を動かしたそうで、3度目の望みをかけて治療をしてくださっているような最中でした。ですが、もう大分時間が経過しているということもあって、私は、医師の方から、延命治療の停止を告げるよう委ねられました。そんなことできるかと。テレビのような話が、自分の大切な娘に降りかかってきたのです。大分決断ができない状態が続いたのですが、「お父さん、これはもう難しいです」と医師の方に説得され、私自身、真緒の治療の停止を告げました。

その後は、真緒と一緒に、真緒を迎えに来てくれる京都府警の方を霊安室で待っていました。自分が「早う準備しいや」と急かさなければ、数年前に亀岡に移り住んできたので、

自分が亀岡に移り住む決断をしなければと、自分のしてきた決断、自分が選んだ道というのを全て恨み、そのときに加害者が未成年で無免許運転の少年だったということを知り、身も心もボロボロになっていました。

その後、京都府警の方が真緒を迎えに来られて、私は真緒を京都府警の方に預けて、長女が運ばれた病院に向かいました。長女の病院には多くの親戚の者が駆けつけてくれて、親戚に囲まれて、長女はベッドの上に座っているような状態でした。私が声をかけると、当時はちょっと言葉が出せないような状態になってしまっていたのですが、私が話す言葉に対して首を傾けたり体を動かしてくれたりすることが、生きてくれている、助かってくれたんだということ、とても喜んだのを覚えています。そのときはもちろんまだ長女には、妹が亡くなったことは話していません。長女のことを再び親族と病院の人達に任せて、私はまた亀岡の方に真緒に会いに行くことにしました。そのときは、もう日付の変わった4月24日になっていました。

以上が、大分簡略化しているところもありますけれども、事件当日の私の体験したことになります。事件によって、自分が想像していた幸せというものを全て奪われました。自分が見られると思っていた娘の笑顔を奪われてしまいました。そして何より、真緒自身は未来に向かって生きる権利を奪われてしまいました。当たり前にあると思っていた日常がこんなにもあっけなく、全く知らない他人によって簡単に壊されてしまう恐怖を突きつけられました。そして、私自身、被害者になるまでは、そういった出来事をどこか他人事のように捉えていました。情けない話ですが、何の根拠もなく、自分が気を付けていれば加害者にも被害者にもなることはないと思っていました。そう信じていました。でも、全くそうではありません。娘達は安全に決められた道をちゃんと歩いていただけです。

多くの交通犯罪、重大交通犯罪は、起こるべくして起こっていると私は思っています。国は交通安全計画の中で、年間の死亡者数を目標2,000ということで掲げていますが、果たしてその中の1人が自分の大切な人でもいいと思っている人はいるのでしょうか。極端できれいごとのように思えるかもしれませんが、現実的じゃないかもしれません。それでもやっぱり目標はゼロで立ててほしいというのが、私自身の願いであります。100でも1でも駄目なんです。その1が自分の、皆様の大切な家族、大切な人だと考えたら、皆様自身も絶対ゼロを掲げるのではないかと私は思っています。

ハンドルを握るドライバー全ての人達が、命のことを大切に思い、ハンドルを握り続けていたら、今まで奪われなくて済んだ命がどれだけあったことかと思います。起こしてやろうと思って交通事故を起こしている人はいないと私自身よく言われますし、私もそう思います。ですから、社会全体が安全意識を高めることさえできれば、交通事故と呼ばれるものは必ずゼロになると私は信じています。そして、この交通社会の中でこども達の命を守ることができるのは、私達大人しかいません。今日の話で、かわいそうやなとか、同情してほしいわけでは決してないのです。今日からでも、命を大切に思う運転について考え

てほしいと思いますし、皆様一人ひとりができることに取り組んでいただきたいと思います。

ここからは、二次被害の話をさせていただきます。「直面と回避」としてありますが、直面として二次被害に直面したことをお話して、回避として、少し私が心を救われたエピソードをお話ししたいと思います。

二次被害というものを皆様御存知かと思いますが、一次被害に起因する様々な被害を私達は二次被害と呼んでいます。精神的ショックや体の不調などが大きくあるのですが、その他にも心ない言葉や態度であったり、周囲の人々の無責任なうわさ話やマスコミの取材報道による精神的被害、また、経済的困窮もよく耳にされるかとは思いますが、今からは私が体験した二次被害をお話ししたいのですが、決して今から話す関係者を責めたり攻撃したいわけではありません。今後どうしたらこういった二次被害がなくなるのかということ、ぜひ皆様にも考えていただければと思うので、お話をさせていただきます。

まず、1番最初に降りかかってきた二次被害、これはネット記事のキャプチャになるのですが、メディア被害です。先ほどお話ししたように、豊岡市の病院に行き、真緒が助からなくて、私が外に出ようと思ったときに、そこに駆けつけてくださっていた警察の方が教えてくれたのですが、「表に報道陣がたくさん来ています」というお話だったのです。正直最初は何を言っているのかなという思いで、大丈夫だろうと思って何も考えずに外に出てみると、多くの報道陣が豊岡市の病院の周りに駆けつけていました。何も答えることもできませんし、カメラを向けられるのも嫌だったので、すぐ病院内に戻りました。それで、警察官の方に、「何も答えることはないし、対応できないから帰ってほしい」と報道の方に伝えてほしい」という旨を説明しました。

ただ、警察の方からお話をいただいたものの、先ほど京都府警が迎えに来ると言った霊安室の外で真緒を車に乗せているときに、報道関係者が、少し遠くからではあったのですが、カメラをこちらに向けているのが分かりました。撮られたくもなかったですし、お断りもしていたにもかかわらず、撮られていることに対して恐怖も感じましたし、また、それを近くで見てくれていた病院の方が、ネットの中ではあったのですが、抗議をしてくださいました。そのときから報道関係者に対して恐怖を覚えました。また、次の日には、私が提供したわけでもなく、対応したわけでもないにもかかわらず、娘の写真、どこかの誰かから入手した集合写真を引き延ばしたかのような娘の写真が報道されてしまいました。なぜ当事者が許可もしていないものがこうやって出てしまうんだろうと、私達に拒否権はないのかなという思いで、本当に恐怖を感じました。

また、数日後には、警察と小学校から、個人情報の漏えい問題がありました。これは何かといいますと、加害少年の父親に対して、まずは警察が、我々被害者の連絡先の一覧を被害者の許可なく渡したのです。私自身も、家にいるときに、加害者の父親と名乗る者から電話がありました。何で電話番号を知っているんやということがあったのですが、声も聞きたくなかったですし、しゃべる気もなかったのですぐに切って、家にいた警察の被害

者支援室の方に、「どこからこんな人に電話番号が回ったのか調べてほしい」というようなお話をしていた矢先に、警察から回ったというような謝罪がありました。

また、同じ被害に遭った妊婦さんの松村幸姫さんの家では、亡くなった本人の携帯に連絡があったそうです。それは、警察ではなく、当時通っていた小学校の教頭先生が、加害者の少年側に対して個人情報、携帯電話番号を教えたというような話でした。もう警察と小学校に裏切られて、私達はどこを頼りにしたらいいのかと、事件1週間以内で全く分からなくなってしまいました。

また、二次被害というものではないのかもしれないのですが、報道も大きくされていたため、日々テレビをつけるとニュースになっていました。ただ、私自身当事者になって、「事故」と呼ばれるところに、とても納得がいきませんでした。辞書で調べたものではあるのですが、不注意などによって起こった悪い出来事と書かれていて、引き起こす結果を予見できた被害に、交通事故という言葉は当てはまらないのではないかという思いで、今でも私は交通事件という言葉で話をさせてもらっています。どうかこういった言葉のところも、皆様、考えてもらえたらと思います。

これは、娘が背負っていたランリュックの写真になります。少し分かりにくいのですが、ランリュックも引き裂かれてしまい、中に入っていた物もぐちゃぐちゃになっていました。ここに写真が出せていないんですけども、娘が前日に買ったたまごっちの筆箱もこの中に入っていて、開けてみると、ピンピンに削った鉛筆が5本入っていて、友達に「買ってもらうてん」と言って見せるのを楽しみにしていたんやろなと思えるぐらい、真緒が楽しみに鉛筆を削っていた姿を、そういった遺品からも考えてしまうようになりました。

また、手続のためとはいえ、死亡届を書くとき、私は手が震えて娘の名前をなかなか書くことができませんでした。私が小谷真緒と書くことによって、この世から真緒の存在が消されてしまうのではないか、そう考えてしまうとなかなか名前を書くことができませんでした。最後は、震える手をもう片方の手で押さえながら、娘の名前を書いたのを覚えています。

その後も、娘達が学校に通っていましたので、学校の書類で家族構成などを書くときも、どうしても私にとっては3人姉妹でありますので、学校などに提出する際は、私は娘の名前を書かないということができなかつた。今も、1番下が高校3年生なのですが、高校3年生の娘の今の書類でも、真緒の名前を家族構成の中で書いたりしています。どう思われるんだろうなという思いがありながらも、私自身そういう決断をして、ずっと書き続けています。

今なぜこの話をしたかというと、私以外、2人の娘達も実は苦しい思いをしていました。事件から数年経ったときに2人の娘から話をされたのですが、それは、進級や進学したときに、新しい環境の中で自己紹介をするような場面で、「とてもしんどいんや」ということでした。当たり前のように自分達のきょうだいの話や家族構成の話をするとき、真緒のことをどうやっていいのか分からないというようなことを、2人はどうも悩んでいたみた

いです。私のように真緒のことを言ったらいいんじゃないかと私は2人に説明したのですが、それでもその話をすると、友達に引かれてしまうんじゃないとか、かわいそうな目で見られるのが嫌やというようなことを2人とも話していました。かといって、真緒がいない、うちは2人のきょうだいやでということ言うことすらも、真緒の存在を否定しているかのようで、そんなことも言いたくない。だから、いつも濁らしているというようなことを2人とも話していました。

姉妹の存在を隠すということに対して、すごい罪悪感を感じてしまっている気持ちも分かりましたし、言ったことによって周りの変化、見る目が変わってしまうという恐怖というのも分かっているだけに、中学生であつたり高校生の娘達にとってはとても苦しいものなのだなと感じました。これから先も抱えながら生きていくのだろうなと思っていますし、それぞれがそれぞれの生き方、自分の心を守りながら、こどもの友達、周りの人達に話したらいいのではないかなと2人には話してあります。

また、長女の小学校の卒業式の話なのですが、長女の小学校は卒業生と、その1つ下の学年の子達が出席する形となっています。式が終わって家に帰ってきた長女に、私は、「おめでとう」と言葉をかけたんですが、そのときに、どこかしら長女は元気がありませんでした。「何かあったんか」と聞いてみると、年子だったんで「送り出してくれる在校生の中に真緒がいないことがとても悔しい」と話してくれました。なぜ長女が自分の卒業式でこんなに悲しい思いをしなければいけないのか、怒りの気持ちが出てくるということは、皆様想像していただけるかなと思っています。

また、事件後の話ですが、他の遺族と一緒にあって、街頭で危険運転致死傷罪を求める署名などもしていました。娘の死を無駄にしないという思いで、みんな一緒になって頑張っていました。課題も残ったままでありますけれども、一定の法改正に結びつきました。その中で、多くの人達と出会い、励ましの言葉もいただきました。講演もさせていただきました。ですが、逆に「立ち向かっていて強いな」「私やったら気が狂って家から出れへんわ」とか、「生きている2人の娘のためにも前を向かな」といった言葉をかけられました。私のことを思ってこういった言葉をかけてくれているのか分からないのですが、こんな言葉は聞きたくありませんでした。加害者に対して憎しみが無いと思われているのかなとか、気が狂ってへんと思われているのかなと、そう思えて仕方ありませんでした。

他にも、時間が経つと、「もう落ち着いた」というような言葉もかけられたりもしましたし、「時間が解決してくれるよ」みたいな、何も理解してもらえない言葉にショックを受けたこともあります。どれだけ時間が経とうが、元通りの生活に戻ることはもうありません。時間が娘の死を解決するものではないと私は思います。

仕事をしていても、頭の中が事件のことで一杯でした。裁判のことや、同じ被害に遭った長女のこと、いろいろ考えていると、真緒を失った悲しみや苦しみというものが押し寄せてきて、仕事中でありながら、急に涙があふれてくるような状態でありました。睡眠不足も続きました。本当に心も体も不安定な状態が続きました。職場の周りの仲間達がすご

く気遣ってくれていたのですが、周りの職場環境の進むスピードに私自身が付いていけなくなってしまうと、他にも様々な要因はあったのですが、事件後、数箇月後に私は会社を退社しました。

数年経ったとき、気晴らしにと、友人、知人が食事に誘ってくれたのですが、そのような席でも、私が加害者に対しての憎しみというものを話し過ぎたせいで、私を落ち着かせようと友人から、「相手も殺そうと思っていたわけじゃないんやし」というような言葉をかけられて、私はその場を受け入れられなくなってしまうと、そういった知人、友人関係の中にも、私が距離を置くようなことになってしまいました。

こういった二次被害というのは、私達が普段使っているコミュニケーションの言葉が、そのほとんどだと思っています。知らず知らずのうちに他人を傷付けているということには、なかなか気付きにくいものだと思います。それまでだったら、何とも思わずに聞き流せたような言葉でも、被害の後の傷付いた心にはどうしても引っかかってしまったりすることが多くあります。私も事件後出会った人に「笑えてよかったわ」というような言葉を言われました。何気なくその人は言ったんだと思うのですが、その言葉に対して、遺族はしょんぼり泣いているのが当然だというふうに考えているのかなとか、そう考えている人には、自分自身が笑っていることが不謹慎なように見えてしまうのかなと変に深く考えてしまったこともありましたが、私自身も、私が笑っていていいのかなというような違和感を感じて自分を責めたり、人と会うことに少し恐怖を覚えたときもありました。

犯罪被害に遭うと、このような周囲との時間軸のずれが生まれたり、かけられる言葉の一言一言の受け止め方が変化してしまうことは、よくあることです。そういったことが社会に対して心を閉ざしてしまう要因だと感じています。ですが、どう接したらいいかわからないということで距離を置くと被害者の方が孤立するので、孤立することが一番駄目だと私自身考えています。決して正解はないのですが、あなたは一人ではないという思いをその方に伝えながら、寄り添ってもらえるような社会であってほしいと願っています。

そして、併せて大切だと感じているのは、被害者自身、当事者自身が選べる制度を作っていただけのような社会だと思います。私も当たり前のように参加していた刑事裁判の被害者参加制度ですけれども、これも2008年12月までは参加できなかったと後で知りました。当事者の方が声を上げてくださり、法整備がされて、被害者参加制度というものができて、被害者が裁判に参加できるようになりました。そして、その制度を利用するかしないかも、当事者である私達自身が選べるというところが、私はすごく重要だと思いました。この先いろいろな被害者に対しての支援制度ができる中で、被害者が選べるような、選択できるような制度を多く作っていただけたらと思っています。

ここからは、心が救われたエピソードということでお話ししたいと思います。皆様にお配りさせてもらっているこの資料は、「まおちゃんの新しい靴」という絵本です。これは、講演活動をしていた中で出会った岡山県の大学生の方が、命の大切さを伝えるという思いを込めて、保育園、幼稚園、学校で紙芝居の読み聞かせをするために、まず紙芝居を作っ

てくれました。そして、今日、絵本の形にして皆様にもお配りさせてもらっています。事件や命について、私達の話聞いて、それぞれができることを考えてもらえたということに私は大変心を救われました。

また、今日、「私について」という皆様のお手元にお配りした資料の下側に、3つQRコードを付けさせてもらっています。1番左がこの「まおちゃんの新しい靴」の紙芝居のサイトになります。真ん中に「親友と「はたちの会」」ということで載せさせてもらっているのは、先ほどのニュースの動画の中でも言っていたのですが、実は先月、1月の成人の日、はたちを祝う会というのが、娘が出席する会でした。そこに娘の保育園、小学校のときのお友達が、「真緒ちゃんも連れて行っていいですか」と家を訪ねてきてくれました。私自身ずっと気がかりになっていた、そういった娘の晴れ舞台、出るはずだった席にどうしようかという思いがずっとあったのですが、そういった私の心の悩みを何も知らずにだとは思いうのですけれども、その子の思いというものによって大変救われました。それを取材していただいたので、それがユーチューブに上がっていますので、ぜひ皆様にも見ていただけたらなと思って御紹介させていただきました。

そして、最初に紹介した、1番下の右に書いてあります「いのちのミュージアム」ですが、生命のメッセージ展との出会いも、私にとって大変心が救われたものでした。娘の真緒がこういったメッセンジャーとなって、この社会で新たに生きる道というものに出会わせてもらいました。命は未来につながるんや、そう信じ合える人達と出会うことができ、私が生きる上でもとても心強い救いとなっております。

1つ1つ周りの方々の温かい支えが、私達犯罪被害者にとっては何よりも救われるものだと思います。他人によって傷付けられて犯罪被害者になっているのですけれども、当事者以外の他人の方の支えがあってこそ、1日でも穏やかに、1日でも心から笑顔になれる日が増えていくのだと、私自身、12年10か月経って感じていることになります。

今、スクリーンに映し出していますのが、事件当初の道路現場の写真になります。花壇の花々がなぎ倒されて、壁すれすれを車が通って行ったのですが、事件に巻き込まれてけがで済んだ軽傷だったこども達は、とても恐ろしい現場を見てしまったんやなど、この写真からも読み取れます。事件後、この道路に様々な対策が講じられました。私達が要望したというのもあって、学校前には事件を忘れない、起こさないためのモニュメントが設置されたり、学校へ願いを込めてハナミズキの植樹もさせていただきました。娘達の犠牲をきっかけに、そういった対策が進められるのは大変ありがたいですし、人が命を大切に思う心の表れだと感じています。事故は起こさない、事件をなくそうと行動されている方々の気持ちというものも、私にとっては大変救われているものであります。

ただ1つ付け加えさせてもらいますと、先ほどの道なのですが、事件後は、ほとんどのこども達が通らなくなりました。別の道を通学路に選ぶようになりました。何が言いたいのかといいますと、どれだけ目に見えるものが改善され、良くなっていったとしても、事件

が心に与えた衝撃というものは、どれだけ日が経とうが拭い去りきれものではないという
ことを、改めて伝えたいと思います。

あと、加害者に関して少しお話をしたいのですが、車を運転していたのは、何度も言いますように、無免許運転の常習者で、免許を一度も取得したことがない未成年者でした。事件を起こすまでの2日間、車内で仮眠を5時間ほど取っただけで、2日間ほぼ丸々遊び通して、その結果の事件になります。運転した少年以外にも、同乗していた少年、車を貸した少年達がいまして、この事件には他にも多くの少年達が関わっていたのですが、それぞれに処分が下されました。

この全ての少年達がルールを無視した結果が、4つの命を奪い、こども達の心と体に傷を付ける大きな事件になりました。加害少年達は、遵法意識が当時は何もなく、大人同様の遊びをしていたにもかかわらず、事件を起こすと少年達自身が守ろうとしていなかった法律によって守られました。何の罪も犯していない私達被害者には、少年達の情報が、少年法によって何も教えていただけなかったのです。加害者を守って被害者を傷付ける、この法律というものがものすごく憎く感じたときでもありました。少年事件に限ったことではないとは思いますが、被害者と加害者の権利というものに、大変格差があると私自身考えています。今後はより一層、その格差のない社会になることを願っています。

もう1つ、皆様に犯罪被害者のための休暇制度についてお話しさせてもらいたいと思います。これは厚生労働省が出されているポスターになりますが、犯罪被害に遭った方に対して特別休暇を付与していこうという取組の1つで掲げておられて、私はこれが社会全体で実現されることを願ってます。事件当時、私も会社の配慮をいただいて、多くの休暇をいただきました。ですが、私自身もちろんですし、私が活動している中で出会った多くの被害者の方にお聞きをすると、この制度の必要性をものすごく感じています。今日お聞きいただいたとおり、事件当時はとても仕事ができるような精神状態ではありませんし、行政手続、警察の捜査、裁判の準備であったり、自身の精神的ケアや家族の精神的、身体的ケアというものに対して、様々な困難が被害者には押し寄せてきます。

私も加害者3名の裁判、3名の少年達の裁判に立ち会ってはいるのですが、事件のあった2012年だけ、事件は4月に起こってまして、約8か月の間に、私が記録しているだけでも17回裁判が行われています。もちろん刑事裁判は翌年も続きましたし、民事訴訟も合わせますと、もっともっと多くの裁判期日がありました。期日だけではなくて、弁護士とのやり取りにもかなりの時間が必要です。誰がいつ被害者になるか分からない、被害者家族になるか分からない、だからこそ私はこの制度は必要だと感じています。

もう1つ数字を皆様に紹介したいと思います。厚生労働省のパンフレット（特別休暇制度導入事例集2023）に載っていました数字を抜粋させてもらっていますが、左が裁判員休暇制度の数字、右が犯罪被害者のための休暇制度になるのですけれども、企業の導入率というものが載っていたのでお示しさせていただきます。裁判員の休暇制度に対して50.4%という数字が書かれておりまして、それに対して、犯罪被害者のための休暇制度は1.4%だ

ったのです。厚生労働省も呼びかけられておられて、先ほど 2011 年度のポスターも映し出しましたが、十何年経ってもなかなか企業には認知もされていませんし、導入されている企業も少ないです。日々生まれてしまう犯罪被害者の支援のためにも、今まで以上により一層、ぜひとも皆様に御一考いただきたいなと思って、今日お示しをさせていただきました。

最後になります。「あなたへ」ということで、皆様に私からのメッセージをお伝えしたいです。最初にお話しさせてもらったとおり、他人事ではなく自分事として捉えてほしいという思いと、生きている今は大切な人とともに過ごせる時間、決して当たり前じゃないということを改めて考えてほしいと思います。お聞きいただいたとおり、娘を奪われて、12 年 10 か月経ったのですが、私自身、事件の当事者になって、様々なことを感じました。傷付けられて苦しんでいる娘が目の前にいるのに、何もしてやれない自分への無力さであったり、火葬場で扉が閉まるときに感じた、生きていて感じたことない絶望であったり、その後、様々な生活の中でも、自分自身の胸を締めつけるような苦しみや、体が震えるぐらいの心の痛み、加害者への憎しみであったり、気が狂ってしまいそうぐらい怒っていたときもありました。娘を絶対守ってやると思っていたはずなのに、守れなかった自分自身の憤りも、もちろん今でも持ち続けていますし、娘がいない未来は考えられへんと思っていたあの当日のことは、今でも鮮明に覚えています。愛する我が子を突然理不尽な形で命を奪われて、こういった思いは、私自身の命が尽きるまで決してなくなる感情なんだなと今は思っています。

ここにおられる皆様も、今日この時間で見たことや感じたことを、ぜひ自分の心だけにとどめずに、大切な人と共有してほしいなと思います。これもまたきれいごとのように聞こえるのかもしれませんが、皆様の血の通った思いがつながっていけば、この社会から犯罪被害というものはなくなると私は信じています。

最後に 4 分ほどのスライドショーを作ってきていますので、ぜひ見てほしいと思います。「真緒へ」ということで、私の思いもコメントとして入れながら、娘の写真を皆様に見ていただきたいなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(スライドショー上映)

今見ていただいたとおり、笑顔一杯の真緒やっतんですけれども、私自身の心、頭には、真緒を思い浮かべると、やっぱり事件当日の苦しむ顔しか正直思い浮かびません。もう誰もこんな思いはしてほしくないから思っています。

当たり前のことで感じにくい、考えにくいことかもしれないのですが、1 日 1 日というのは、とてもはかなく尊いものだと思っています。皆様自身がその 1 日を大切に考え、また、自分の大切な人達とともに過ごす時間を大事にしてもらえれば、そういった思いが必ずこの社会から犯罪の根絶につながって、また、実際起こってしまったときのための犯罪被害者支援の拡充につながる思いだと私は信じています。

言葉足らずで分かりにくいところもあったとは思いますが、私の話に耳を傾けてくださってありがとうございました。